

男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？（１） — 保育専攻を卒業した男子学生への質問紙調査から —

What Do Students who Studied to Become Male Childcare Workers Do Now? (1):
Results of a Survey of Men who Graduated from a Childcare Worker Training School

(2011年3月31日受理)

富田 昌平 小野 文子
Shohei Tomita Ayako Ono

Key words : 男性保育者, キャリア発達, ライフコース

要 約

本研究では、保育者をめざした男子学生のその後について質問紙調査を行い、それにより、保育者をめざす男性が直面するキャリア発達上の危機やライフコースの在り様について検討した。本稿はその第一報である。卒業生41名による回答の結果、現在保育職に参入している者は9名（20%）、過去に保育職参入経験がある者は15名（39%）、保育職参入経験がない者は17名（41%）であった。また、過去に保育職参入経験がある者の大部分は、3年以内の離職であった。保育職参入のきっかけは「出来事」と「思い」の2つに分けられ、特に男性特有と思われる回答として、「自分流の生き方への憧れ」や「生きがい・働きがいの探求」等が示された。保育職への参入・非参入の決断時における思いや葛藤としては、参入したケースでは、「勉強したからにはなりたいという思い」、「自分を受け入れてくれる園の存在」、「自分にはこれしかないという思い」等、非参入のケースでは、「新たな可能性との出会い」の他、「自分を受け入れてくれる園の不在」や「給与面での不安」、「保育者になることへの自信のなさ」、「女性の職場で働くことの難しさ」等が示された。

問 題 と 目 的

1. 問題の所在

日本初の男性保育者の誕生は、男性保育者連絡会の調べによると1968年のことである。その後、男女平等、婦人の権利擁護の運動が盛んになる中、児童福祉法施行令第22条が改正され、男性も正式に保育職に従事できるようになったのは1977年のことである。しかし、この時点での名称は依然として「保母」のままであり、保育職に従事する男性に適当な名称は与えられず、通称で「保父」と呼ばれてきた（西野，1997）。

男性保育者に晴れて正当な名称が与えられるようになったのは1999年のことである。児童福祉法施行令の改正により、保育職に従事する男女に共通の名称として「保

育士」という名称が与えられた。以来、それまで女子短大が多くを占めていた保育士養成校も共学化が進み、合わせて保育士養成校の四大化も進み、その結果、保育者を目指す男性の数は急激に増加した。男性が保育職に参入しやすい下地はこれまで以上に整ったと言える。

にもかかわらず、男性による保育職への就職は相変わらず狭き門である。仮に就職できたとしても、早期に離職する者が後を絶たない。なぜなのだろうか。そこには男性が保育職に従事して、生涯にわたってキャリアを積み重ねていくことを困難にさせる要因が数多く存在しているものと思われる。

そこで本研究では、短期大学の保育者養成校において保育士資格および幼稚園教諭二種免許状を取得し卒業した男子学生を対象に、質問紙調査を行うこととした。入

学当初は保育職を志した彼らが、その後の紆余曲折の中で、ある者は変わらず夢見た道を突き進み、ある者はその道を断念して別の道を選択するに至った、その経緯について明らかにする。それにより、保育者をめざす男子学生や、保育者としてのキャリアをスタートさせた男性保育者への支援の一助としたい。

2. 先行研究の概要

研究をすすめるにあたって、男性保育者に関する先行研究を整理し、その概要を明らかにすることは、本研究の位置づけを明確にする上でも重要である。

国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (Citation Information by NII: CiNii) に収録されているデータベースから、「男性保育者」、「男性保育士」の2つのキーワードをもとに検索したところ、重複してヒットした論文を除き、90件がヒットした (2011年3月20日時点)。

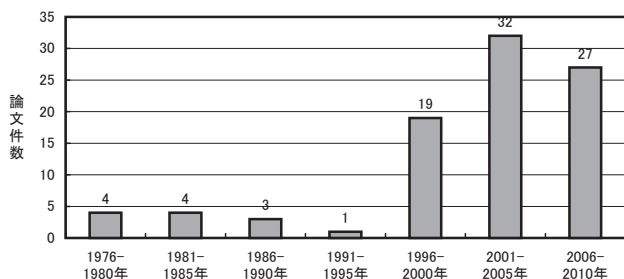


図1 男性保育者研究の件数の推移

1976年以降、5年ごとに区切ってその発表件数を見ていくと、図1に示す通りとなった。図1に示すように、1977年の児童福祉法施行令の改正により、男性保育者が法的に認められるようになる前後から数年の1985年まで、男性保育者に関する研究へのニーズが高まり、1976年から1985年までの10年間で研究件数は8本と増加したものの、その後、研究に対する関心は急速に低下したようで、1986年から1995年までの10年間で研究件数はわずか4本にとどまっている (そのうち2本は85年までの学会発表を研究紀要にまとめたものである)。しかし、その後、1999年の同施行令の改正により、保育者の名称がそれまでの「保母」から男女共通の「保育士」へと変更した前後から、研究件数は大きく増加に転じていく。表1に示すとおり、1996年から2005年までの10年間で研

究件数は51本にまでのぼり、その後の5年間でも27本が発表され、現在に至っている。

研究の内容に目を移すと、初期の研究では男性保育者に対する意識調査を質問紙法によって行ったものがほとんどである。例えば、この分野の草分け的研究である佐々木ら (1976) の研究では、園長・主任95名、女性保育者431名を対象に質問紙調査を行っている。そこでは、男性保育者の有無や身分、必要性の有無やその理由などについて尋ねている。また、井村 (1982) は女性保育者368名に、職場における男性保育者についての話し合いの有無や、女性保育者と男性保育者の専門的技術・能力の差、体力的な差、年長児や男児に対する指導、男性が保育者を目指す場合の障害、保育者の職名、保育所で男性が乳児の保育を担当すること、男性保育者に対する期待等について尋ねている。

こうした意識調査は当初、絶対的多数を占める女性保育者のみを対象としていたが、その後は男性保育者当人も含めた意識調査へと移行していく。例えば、米谷・宮本 (1986) は、現職の男性保育者や保育者志望の男子学生に質問を行い、その保育観や職業観を明らかにしている。また、米谷・宮本 (1988) ではさらに対象を園長・主任、女性保育者、女子学生へと広げ、男性保育者の養成に向けて今後の課題を明らかにしている。

先述したように、この分野の研究は1986年から1995年にかけて、その数自体は減少する。その理由としては、先に紹介した研究において、男性保育者に関するいくつかの疑問 (主には「保育現場において男性保育者の存在はどのように捉えられているのか?」) が解消されたことがあげられるだろう。また、男性保育者に対する社会的認知度も高まり、先駆的研究としての役割は一定程度果たされたと考えられた側面もあるように思われる。では、その後の10年間で保育士資格を取得する男性の数や男性保育者の数は増えたのであろうか。答えは否である。男性保育者に対する社会的認知度や社会的ニーズの高まりに反して、保育士資格を取得する男性の数や保育者養成校に入学する男性の数は、ほとんど増えなかったのである (小田ら, 1996; 西野, 1997; 小崎, 2000)。

こうした現状をふまえて、90年代後半、男性保育者論議の機運は再び高まり、研究が盛んに行われるようになる。研究の関心としては、これまでの意識調査に加えて、

「男性保育者の雇用と定着を妨げる要因とはいったい何か？」といった雇用実態や職業上の困難さに焦点を当てた研究や、「男性保育者はどのようにキャリアを積み重ね、人生を歩んでいくのか？」といったキャリア発達やライフコースに焦点を当てた研究が盛んに行われるようになったことが、90年代後半以降の大きな特徴である。また調査方法としても、従来の質問紙調査法に加えて、調査的面接法、自然観察法など、より多様な調査方法が取り入れられるようになったこともこれ以降の特徴である。

意識調査に関して言えば、例えば、齋藤ら（1998）は女性保育者228名を対象にした質問紙調査の結果、①男性保育者の保育現場への参入に対して女性保育者は総じて肯定的であること、②男性保育者がいることのメリットはデメリットを大きく上回ること、③男性保育者に期待する資質や役割は、男性性を生かした資質を期待する意見がある一方で、まず保育者としての資質を問うものが多く、保育者としての男女の役割分担は必要ないとの意見が多数であること、④男性保育者の数の増大には条件整備だけでなく、男性自身の意識改革も重要であると考えられていることなどを明らかにしている。総じて、女性保育者は男性保育者の存在意義や役割を積極的に評価しており、こうした結果は「予想以上」であったとまとめている。また、鈴木ら（2000）は、保育所・幼稚園の就園児の保護者636名を対象に質問紙調査を行った結果、保護者では父母ともに男性保育者に対して肯定的意見を持つ者が大半であり、その傾向は特に男性保育者のいる園に子どもを入園させている保護者に強いことを明らかにしている。このように、男性保育者の存在意義や役割に対する評価は、女性保育者、保護者ともに肯定的かつ好意的であり、こうした結果はその後の研究でもくり返されている（菊池・菊池，2001；齋藤，2001，2002，2003）。

ところで、先に紹介した齋藤ら（1998）の調査では、「保育者としての男女の役割分担は必要ないとの意見が多数」との結果が示されているが、その他の研究では必ずしもそうとは限らないことが示されている。例えば、保育園長を対象にした長田・高橋・諏訪（1996）、竹沢（1999）、米谷・角野（2000）、本多ら（2007）の調査では、採用者側としては男性保育者に女性保育者にはない「男らし

さ」を求めていることが示されている。端的には、女性の「細やかさ」に相対する「力強さ」であると考えられるが、こうした結果は何も目新しいものではなく、従来の研究（米谷・宮本，1986，1988）においても報告されており、やはり採用者側の園長による男性保育者に対する期待として、「活動的な遊び・運動」「父親的役割」「力仕事や修理」等が挙げられている。また、男性保育者に対する同様の期待は、採用者側である園長にとどまらず、同僚の女性保育者や就園児の保護者においても見られることが確認されている（齋藤，2001，2002，2003）。

男性保育者も女性保育者も、「男性である」「女性である」という以前に一人の人間であり、一人ひとりの個性や特技、持ち味を生かしながら、一人の人間として子どもたちと接していくことが大切である、という大前提の意識とは裏腹に、現実の保育場面ではどうしても男性には「男らしさ」を期待してしまう。その一方で、「女性らしい細やかさが保育・子育てには必要」といった旧来からの「母性神話」にもとづいて、「女らしさ」も同時に期待される。赤澤（2004）は、男性保育者は「男らしさ」を要求される一方で、「女らしさ」も同時に切望されるとし、これを男性保育者が直面するダブル・スタンダードであると述べている。男性保育者が直面する困難は、この他にも採用の問題、賃金の問題、施設設備面の問題、人間関係の問題など様々に存在する。これらの問題に対して男性保育者一人ひとりがどのように向き合い、どのように克服していくのか。90年代後半以降、こうした側面に研究の関心がシフトしていったのは、いわば必然であると言えよう。

男性保育者のキャリア発達やライフコースに焦点を当てた研究は、最初、西野（1997）によって行われ、その後、中田（1999，2000，2001，2002）によって数多くの綿密な研究がなされている。西野（1997）は男性保育者16名を対象に個別インタビューを行っている。面接では、男性保育者自身に自らの職業選択や職場体験を振り返ってもらい、いかなる体験を危機と捉え、それをいかにして乗り越えてきたと意識しているかを探ることを目的とし、主に以下の6つの質問項目を設定している。①保育者を目指した動機、②男性保育者としての職業経験を振り返って、「辞めたい」と思った出来事とその時の相談相手、③その危機の克服の仕方、④男性保育者の仕事の

意欲を減退させる要因、⑤保育の仕事を継続させる魅力、⑥男性保育者の動機。このうち、キャリア発達上の危機に関して取り上げると、①自己に起因する危機（経験の未熟さからくる戸惑いや自信喪失、マンネリなどからくる倦怠感など）、②児童の特性に起因する危機（仕事の責任感や重圧など）、③職場の人間関係に起因する危機（職場の同僚との対立や上司との意見の食い違いやものの考え方の違いなど）、④制度に起因する危機（勤務の配置換えや転勤など最適過程に生じるストレスや経済面の不安など）、⑤職場の特性に起因する危機（女性ばかりの閉鎖的社會により、リフレッシュできる人間関係が持てないことなど）、⑥保護者との関係に起因するもの、という6点が挙げられた。また、仕事の意欲を減退させる要因としては、①給与など経済面の保障の悪さ、②仕事への空虚感・疑惑、③職場環境、④低い社会的評価という4点が挙げられている。

他方、男性保育者が直面する危機とその克服方法を中心に、彼らのキャリア発達に焦点を当てた西野（1997）の研究とは異なり、中田（2000, 2001）の研究では、彼らのライフコースに焦点が当てられる。そこでは一人の男性がある出来事をきっかけとして保育職に興味を持つようになり、自らの進路を選択し、保育職に参入し、様々なキャリアの影響を受けながら、男性保育者としての自らの人生を歩んでいく、その道筋が描かれる。男性保育者64名に対する質問紙調査の結果をもとに、中田（2000）により描かれた男性保育者の典型的なライフコースは、次のようなものである。まず、彼らには彼らの母親や叔母が保育職またはそれに類した仕事に従事しているという背景が往々にしてある。大学進学後、在学中に子どもと直接関わるボランティアや実習等といった「出来事」を転機として、保育職に興味を持つようになる。その際、保育職に対するイメージとして、「女性職」ではなく「教育・福祉の専門職」というイメージを持つことが後に重要な意味を持つ。転機となる「出来事」との出会いを経て、卒業時には保育職への参入という進路選択で葛藤を迫られるが、そのとき重要な他者として両親がクローズアップされる。

さらに中田（2001）は、転機となる「出来事」にいつどのように出会うかによって、それぞれのライフコースは異なると予測し、特に、18歳時点での歴史的背景が

その後のライフコースにどのように影響を及ぼすのかをコーホート分析により検討している。この分析では、調査対象者65名を18歳時点が1973～1983年であった群（C1）と、1984～1990年であった群（C2）、1991～1997年であった群（C3）とに分け、そのライフコースの違いを探っている。その結果、例えば、保育職志望時期は若年層ほど早く、C1では大学卒業時の22歳が中央値であったのに対して、C2では高校卒業時の18歳、C3では高校在学中の17歳と、徐々に志望時期が早まっていることが示されている。各コーホートの典型的なライフコースについても次のように示している。C1では、大学卒業、保育職以外の職業に就職、専門学校等へ進学、保育職就職、資格取得という道筋を経る、C2では、大学卒業、専門学校などで資格取得、就職という道筋を経る、C3では、専門学校や短期大学で資格取得し、就職という道筋を経るという。

中田によるその後の研究では、男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響（中田, 2002）や、男性ではなく女性保育者のライフコースの検討（中田, 2003a）、全国紙における「男性保育者」言説の変遷の分析（中田, 2003b）、男性保育士による低年齢児保育の困難という問題の検討（中田, 2003c）、男性保育者による「保育者」定義のシークエンスの検討（中田, 2004）等がなされているが、いずれも男性保育者のライフコースに影響を及ぼすと考えられる歴史的・文化的文脈に焦点を当てた研究と言ってよいであろう。

3. 本研究の目的

ここまで、男性保育者に関する先行研究を概観してきた。研究の結果、「保育現場において男性保育者の存在はどのように捉えられているのか？」といった人々の意識に焦点を当てた研究については、かなりの知見が蓄積されているものの、「男性保育者の雇用と定着を妨げる要因とはいったい何か?」「男性保育者はどのようにキャリアを積み重ね、その人生を歩んでいくのか?」といった問題については、まだ十分に知見が蓄積されたとは言えない。中でも、この種の研究を行う場合、どうしても現在男性保育者として勤務している男性のみに焦点が当てられることに、筆者としては違和感を感じざるを得ない。

筆者は保育者養成校に勤務してから10年の間に、数多くの男性保育者を目指す男子学生と出会ってきたが、彼らの多くは女子学生以上に自らが保育者になることに対して強い葛藤の渦にさらされ、卒業時に厳しい進路選択を迫られることとなる。保育者になるという自らの夢を卒業時に叶えられた者は、女子学生におけるその割合と比較するとわずかに過ぎない。仮に叶えられたとしても、「一年間のお試し期間」という条件が付された挙げ句、一年後には契約を切られたというケースもよく耳にする。男性保育者のキャリア発達やライフコースを本当の意味で描いていくためには、こうした現在男性保育者ではない者たち、すなわち、保育者養成校に入学した時点では将来男性保育者になるという夢を思い描いていたにもかかわらず、その後の紆余曲折においてその夢を断念せざるを得なかった者たちの人生経路はどのようなものなのか、キャリアにおける危機とはどのようなものであったのかを描いていく必要があると思われる。

このように書くと、彼らがあたかも人生の敗者であるかのような印象を与えるかもしれないが、もちろん、そうではない。卒業時に保育職に参入しなかった、あるいは一度は参入したもののその後退職し、現在は別の職種で働いているというのは、一つの進路選択であり、非常に尊いものである。本研究はあくまでも、保育者養成校を卒業した男子学生のキャリア発達上の危機とそのライフコースを描くことによって、今後の男性保育者研究に資すること、及び今後の男性保育者養成に貢献することを目的としたものであり、どの人生が正しいか云々を議論するものではない。このことは念のため強調しておく。以上から、本研究では、保育者養成校を卒業した男子学生を対象に質問紙調査を実施する。それにより保育職を志望して養成校に入学し、資格・免許を取得して卒業した男子学生が、卒業時あるいはその後に直面するキャリア発達上の危機やライフコースについて明らかにすることを目的とする。なお、「保育職」とは、制度や法令上、保育所や幼稚園で働く者のみを指す言葉ではなく、児童養護施設や乳児院、知的障害児・者施設など、各種児童福祉施設で保育士として働く者に対しても使われる言葉であるが、本研究では特に保育所保育士及び幼稚園教諭に焦点を当てるため、保育所や幼稚園で働く者に限定して「保育職」という言葉を使用することとし、児童養護

施設や乳児院、知的障害児・者施設などその他の児童福祉施設で働く者に対しては「福祉関係」という言葉を使用することとする。

本稿は研究の第一報であり、主に保育職参入のきっかけと保育職への参入・非参入の決断時における思いや葛藤に焦点を当てる。

方 法

1. 被調査者と手続き

中国地方の保育者養成校2校（ともに短期大学）の男子卒業生179名に質問用紙を郵送し、約1週間後に回収した。このうち29名分が宛所不明で返送され、43名から返事があった。宛所不明を除いた回収率は28.6%であった。郵送先は学生たちが入学時の実家の住所に基づいているため、回収期日までに本人に届いていないケースも多くあったであろうことを考えると、今回の回収率は決して悪くない数字であると言えよう。回答が得られた43名のうち2名は、短大卒業後すぐに専攻科に進学し、現在も在学中であり、働いた経験がなかった。従って、以下の分析では、この2名を除いた41名分を対象とする。なお、今回対象とした保育者養成校のうち1校は専攻科介護福祉専攻（1年課程）の設置校であり、男子学生の場合、卒業後そちらに進学する者も多数存在する。その意味では、本研究のデータは一般的な保育者養成校とは異なる特殊性を持ったデータであり、慎重に扱う必要がある。

2. 調査項目

調査用紙はA4サイズであり、フェイスシート1頁を加えた計6頁で構成された。質問項目は、年齢、卒業年、現在の職業、過去の職業の履歴、保育職経験の有無、保育職に興味を持ったきっかけ、養成校入学の決め手、卒業直後に保育職に就いた理由・就かなかった理由、保育職を現在まで続けている理由・途中退職した理由、保育職に再就職した理由・再就職しなかった理由、きっかけから現在に至るまでのライフコースの図式化、現在養成校に通う男子学生へのメッセージ、などであった。

3. 調査実施時期

2007年11月から12月。

結果と考察

1. 被調査者の年齢と卒業年度

被調査者の年齢は20代前半（20～24歳）が14名（34%）と最も多く、次いで20代後半（25～29歳）13名（32%）、30代前半（30～34歳）8名（20%）、30代後半（35～39歳）5名（12%）、40代（40～49歳）1名（2%）の順であった。養成校の卒業年度は2000年代の卒業生が25名（61%）と最も多く、次いで1990年代10名（24%）、1980年代2名（5%）、未記入4名（10%）であった。

2. 被調査者の過去と現在の保育職経験の内容

被調査者41名のうち、現在保育所や幼稚園で働いている者は9名（20%）、現在は別の職業に就いているが、過去に保育所や幼稚園で働いた経験がある者は15名（39%）、卒業後一度も保育所や幼稚園で働いた経験がない者は17名（41%）であった。

被調査者の現在の職業は、図2に示すとおりである。現在保育所や幼稚園で働いていると回答した9名はすべて保育所勤務であり、そのうち国公立が5名、私立が3名、認可外が1名であった。また、過去に保育所や幼稚園で働いた経験があると回答した15名の現在の職業は、福祉関係の職業8名、一般職6名、教育関係の職業1名であった。さらに、卒業後一度も保育所や幼稚園で働いた経験がないと回答した17名の現在の職業は、福祉関係の職業14名、一般職3名であった。

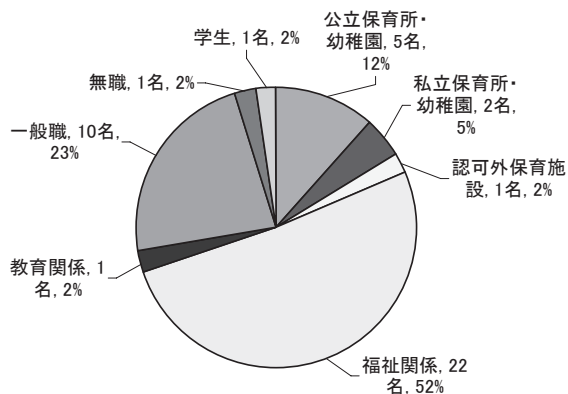


図2 被調査者の現在の職業

現在保育所や幼稚園で働いていると回答した9名のうち、役職についている者は2名（副園長と主任）であった。保育職の経験年数は5年未満が1名、5年以上10年未満が5名、10年が2名であり、年齢構成は20代後半が5名、30代前半が2名、30代後半が2名であった。現在担当しているクラスは3歳児が4名、5歳児が2名、3歳から5歳までの縦割りクラスが2名であった（1名は副園長のためクラスを持っていない）。

過去に保育所や幼稚園で働いた経験があると回答した15名は、すべて20歳ないし21歳からの勤務であり、短大または専攻科の卒業後すぐに就職したようであった。最も長く続けた者は32歳までの12年間であり、次いで27歳までの7年間であった。ただし、前者は市役所勤務への異動が離職理由であり、後者は勤務園との契約切れが離職理由であった。ちなみに、後者は7年間で勤務園を3回以上変えており、最後の勤務園との契約が切れたときも保育職を継続したかったが、その時点で家族がいたため経済的状況を鑑みて継続を断念したとのことであった。これら2名を除いた残り13名はすべて21～23歳までの1～3年間で退職しており、このことから男性保育者の早期離職傾向がうかがえる。

3. 保育職に興味を持ったきっかけ

「保育職に興味を持ったきっかけ」と「養成校入学の決め手」という2つの質問に対する回答をもとに、被調査者が男性保育者を目指そうとした、そのきっかけとなる内容を分析した。無回答もしくは「きっかけは特にない」と回答した5名を除く、36名分の記述を分析の対象とした。表中のパーセンテージは回答者36名を母数としたものである。なお、きっかけは当然のことながら多種多様であり、場合によっては一人が複数のきっかけを持つことがある。従って、各カテゴリーへの分類は排他的ではない。分析の結果、「きっかけ」は大きく「出来事」と「思い」の2つに分けられ、さらに10の下位カテゴリーに分けられた。各カテゴリーの名称と具体例及び人数は表1に示すとおりである。

表１ 保育職に興味を持ったきっかけ

カテゴリー	具体的な記述例	人数	%
出来事	親・親戚等の影響	9	25%
	・親が教員でずっと子どもに関わる仕事がしたいと思っていた。（29歳，公立保育園） ・高校時代，小学校の教諭をしている親戚と話をしているなかで，「就学前の教育にも男性が必要でないか」という話になり，それまで目指していた小学校教諭を幼稚園教諭へと目標を変更した。（43歳，教育関係） ・母親が保育士であったことで身近に保育の仕事があったから。（24歳，福祉関係）		
	テレビ・新聞・マンガ等の影響	8	22%
	・偶然視界に入ったTV番組（NHK?）で「保育所で働く男性」といった内容をやっていた。その頃は，近所にもいわゆる幼児が数名いて，一緒に遊ぶ（相手をしてあげる）ことも多々あり，その存在にとっても興味・関心があった。確か中2の頃です。（31歳，認可外保育園） ・高校2年の冬，テレビ番組を見ていて，男性でも保育士になれることを知った。（22歳，一般職） ・「めぞん一刻」というマンガにも影響を受けた。（33歳，福祉関係）		
	職場体験・ボランティア等での子どもとの出会い	8	22%
	・高校でのボランティア体験教室で子どもと触れ合う機会が何度かあり，幼い子どもから先生とかお兄さんとか言われて喜びを感じた。（23歳，福祉関係） ・高校でのボランティア活動で，保育園へ行き，子どもに関わる仕事に興味を持ったから。（29歳，福祉関係） ・高校3年のときに，託児スタッフのボランティアに参加し，そこで子どもたちと触れ合ったときに，「子どもたちとかかわる仕事がしたい」と思うようになり，保育者養成校への受験を決意した。（22歳，一般職）		
	身近な年下の子どもとの遊びや世話	7	19%
	・小学6年の時と高校1年の時に2人妹が生まれ子どもが好きになった。（25歳，私立保育園） ・10代の頃に従兄弟が生まれ，よく子守をしていました。その時に楽しく感じるコトがあり興味をもちました。（23歳，福祉関係） ・中学生の時に11才離れた妹の世話をしていた，将来こういった仕事に就きたいと思ったのがきっかけ。（24歳，福祉関係）		
	身近な男性保育者・志望学生の影響	3	8%
	・高校の先輩，同期の友達も幼児教育の道へと進むという話を聞いて勉強しようと思いました。（24歳，福祉関係） ・1つ上の先輩が「保育士になる」と言ったこと。（23歳，一般職）		
思い	子どもに対する好意的感情	11	31%
	・単純に子どもが好きで，子どものことを知りたいと思い。（24歳，福祉関係） ・小さい頃から子どもと遊ぶのがスキだった。（26歳，公立保育園） ・子どもが好きで，保育士の仕事が楽しそうにみえたから。（24歳，福祉関係）		
	人と関わる仕事への興味	4	11%
	・子どもと関わる仕事に就きたかった。（24歳，一般職） ・悩んだ結果，人と関わる仕事をしようと思い，保育の道を選びました。（24歳，福祉関係） ・自分には“人”相手の仕事しかないと思ったから（工業高校だったこともあり）。（24歳，福祉関係）		
	自分流の生き方への憧れ	4	11%
	・流れ作業のように毎日同じことをするのは自分には合わないと思った。（39歳，福祉関係） ・スーツ姿で仕事をするのは，自分には合っていないかなと思った。（24歳，福祉関係） ・やるなら好きなことを，人があんまりやったことのない職業をしたいと思った。（30歳，公立保育園）		
	生きがい・働きの探求	2	6%
	・自分にとってやりがいがある仕事だと感じたから。（36歳，福祉関係） ・自分らしく働ける仕事だと思ったから。（24歳，一般職）		
	特技・持ち味の活用	2	6%
	・小さい頃から音楽が好きでピアノを習っていたので，活かせる職に就きたかった。（36歳，福祉関係）		

「出来事」の中でも最も多かったのは「親・親戚の影響」であり、9例ほど確認された。先行研究でも、男性保育者のライフコースの典型例として、親または親戚が教育・福祉職に従事していることがあげられていたが（中田、2000）、本研究でも同様のケースは6例ほど確認された。次いで「テレビ・新聞・マンガ等の影響」（8例）、「職場体験・ボランティア等での子どもとの出会い」（8例）、「身近な年下の子どもとの遊びや世話」（7例）が多く観測された。テレビ・新聞・マンガ等の影響は、一見すると若年層に多いきっかけであるように感じられるが、実際には異なり、20代では27名中4名（14%）なのに対して、30代以上では14名中4名（29%）がこれをきっかけとして挙げるというように、30代以上に多く確認された。また、中学・高校の授業で職場体験やボランティアを通して地域の子どものと触れ合える機会がもたれるようになったのは、ここ10数年のことである。従って、これをきっかけとして挙げた8名はすべて20代の者であった。他方、近所の年少の子どもや、年の離れたきょうだい、親戚の子ども等、身近な年下の子どもとの触れあいについては、幅広い年齢層で見られた。その他、男性保育者をしている親戚や現在男性保育者を目指して養成校に通っている先輩の影響という「身近な男性保育者・志望学生の影響」も、3例ほど確認された。

「思い」の中で最も多かったのは「子どもに対する好意的感情」であり、11例ほど確認された。とにかく小さい頃から子どもが好き、子どもと遊ぶことが楽しいという思いは、保育者を目指す者であれば真っ先に語られる内容である。こうした思いは先に述べた「出来事」の積み重ねを通して意識化され増幅していくものと思われるが、きっかけとして単純に語られる傾向にあった。次いで多かった「人と関わる仕事への興味」（4例）もまた、ある特定の「出来事」との出会いを契機として生じることが多いと思われるが、一方で、回答者自身の生き方をも強く感じさせられる内容であった。こうした生き方への志向性が感じられる内容は、次の「自分流の生き方への憧れ」（4例）、「生きがい・働きがいの探求」（2例）も同様であった。これらは、回答者自身が10代から20代にかけて自らのアイデンティティを模索していく中で辿り着いた一つの信念であると思われる。この記述からは「自分はこのように生きる」という力強さ・たくましさ

が感じられる。また、大好きな音楽の技術を活かしたいという思いから、保育職を選択したという「特技・持ち味の活用」も、2例ほど確認された。

4. 保育職参入・非参入の決断時における思いや葛藤

先に述べたように、被調査者41名のうち、現在保育所や幼稚園で働いている者は9名（20%）、現在は別の職業に就いているが、過去に保育所や幼稚園で働いた経験がある者は15名（39%）、卒業後一度も保育所や幼稚園で働いた経験がない者は17名（41%）であった。調査対象となった2つの養成校では、毎年、卒業生の75%から85%程度が保育園または幼稚園に就職している。この事実を考えると、現在と過去の保育職勤務歴69%という数値は決して低いものではないと一見感じられる。しかし、卒業してすぐに保育職に就職した者の人数を集計してみると、41名中18名（44%）に過ぎず、短大卒業後、専攻科進学を挟んで保育職に就職した4名を含めても22名（54%）に過ぎないことが分かった。もちろん、卒業時までに夢の内容を消極的にではなく積極的に変更したという者も相当数いるとは思われるが（例えば、男性保育者への道の困難さに直面して、夢を断念したのではなく、自分により相応しい新たな道が見つかったためなど）、その点を考えたとしても、低い数値であることには変わりないであろう。こうした結果を見ると、やはり男子学生にとって、卒業時にすぐに保育者という夢を叶えることは、女子学生のそれと比べて困難であることがうかがえる。

「卒業直後に保育職に就いた理由・就かなかった理由」という質問に対する回答をもとに、被調査者が養成校卒業時に保育職に参入するか否かの決断を迫られたときに感じた思いや葛藤の内容を分析した。表2は、卒業時に保育職に参入した者と参入しなかった者のそれぞれにおける決断時の思いや葛藤の内容をまとめたものである。短大卒業直後あるいは専攻科進学直後の保育職参入者は22名であり、このうち20名から回答が得られた。また、卒業直後の保育職非参入者は19名であり、全員から回答が得られた。表中のパーセンテージは各回答者20名と19名を母数としたものである。先ほどの分析と同様に、各カテゴリーへの分類は排他的ではない。表2に示すように、参入・非参入のそれぞれで各10のカテゴリーに分けられた。

表２ 保育職参入・非参入の決断時における思いや葛藤

カテゴリー		具体的な記述例	人数	%
参入	勉強したからにはなりたいという思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児教育科でせつかく保育の勉強を2年間したのだから、これを卒業して無意味にしたくなかった。施設実習、保育園実習、幼稚園実習のどれも大変な実習でした。だからこそ、就職すべきと思いました。（24歳、福祉関係） ・ 親に短大まで行かせてもらい自分が取得した資格を「使わない」という考えはなかった。（28歳、福祉関係） ・ なりたくて学校に行ったので、ならないという選択は考えてなかった。（31歳、福祉関係） 	8	40%
	自分を受け入れてくれる園の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・ 男性保育士の就職が厳しい中、自分以外にも男性を受け入れており、今回自分に対して良いイメージを抱いてくれたこと。（24歳、一般職） ・ 地域の合同就職試験に合格したので。あとは流れにまかせなんとなく。（27歳、一般職） ・ 家から通勤可能な保育所に男子保育士を受け入れてくれる所があったから。またその保育所が家庭的な雰囲気を持っていて勤めやすそうに感じたから。（24歳、福祉関係） 	6	30%
	採用への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・ 決断においては、悩みはなかったが、「はたして、採用してくれるだろうか」という不安は少しあった。（43歳、教育関係） ・ 就職活動時に保育園を探して4園ほどに問い合わせるが、どの園も男性は雇ってないと言われていた。（23歳、福祉関係） 	4	20%
	自分にはこれしかないという思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分にはこの仕事しかないと思い決めました。（39歳、保育園） 	3	15%
	男性としての立ち位置のあいまいさ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの相手、保護者の相手ということで、男性である自分がきちんとした対応や相手に不信感をあたえないか、などの不安は最後までありました（今でもありますが…）。（27歳、保育園） 	2	10%
	一度はやりたいという思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育の現場を試してみたかった。（36歳、一般職） ・ 絶対に1度先生として子どもたちと会いたかったから。（23歳、一般職） 	2	10%
	なりたい保育者像の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・ おもしろい（今までにいない）先生になりたかった。かつこいいと思った。（30歳、保育園） 	1	5%
	給与面での不安	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給料面で一生働けるか不安はあった。（36歳、一般職） 	1	5%
	女性の職場で働くことの難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 女性の職場というイメージが強かった。（29歳、福祉関係） 	1	5%
	いつまで続けられるかという不安	<ul style="list-style-type: none"> ・ 年をとったら（40歳くらい）現役でできるか、まわりの目など不安があった。（30歳、保育園） 	1	5%
非参入	新たな可能性との出会い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 福祉（老人）を学び、実習に行き、そちらの方が楽しく、やりがいを感じた。（24歳、福祉関係） ・ もう1年専攻科にいけば介護士として働ける道があり、そちらへの興味が大きくなったから。（23歳、福祉関係） ・ 障害を持つ人たちに強く惹かれて“知りたい”，“力になりたい”と思っていたため。尊敬できる人が保育施設には少なく、福祉施設に多く居たから。（24歳、福祉関係） 	11	58%
	自分を受け入れてくれる園の不在	<ul style="list-style-type: none"> ・ 男性を求めている所が少なかったから。（30歳、福祉関係） ・ 保育所関係や児童養護施設を探したが求人が少なかった。（25歳、保育園） ・ 2つほど保育園、幼稚園を受けましたが落ちました。（29歳、福祉関係） 	7	37%
	給与面での不安	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給料も安く、将来が不安であった。（24歳、福祉関係） ・ 給料などの収入面で、家族が出来た時を考えた時の不安あり諦めました。（23歳、福祉関係） 	6	32%
	保育者になることへの自信のなさ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今思えば、自身の保育者としてのレベルの低さに自信を失っていたのかもしれない。（31歳、認可外保育園） ・ 実習を通して、自分にはクラスをまとめる力がないことを自覚し、自信をなくしたため。（23歳、福祉関係） 	6	32%

女性の職場で働くことの難しさ	・女性の中で働くことの難しさを感じた。(33歳, 福祉関係) ・女性の職場というイメージが強かったこと(人間関係がめんどくさい)。(24歳, 福祉関係)	3	16%
いつまで続けられるかという不安	・若い時しかできないと思い将来性のなさを感じた。(29歳, 一般職)	3	16%
男性としての立ち位置のあいまいさ	・実習へ行った際に男性としての立ち位置などを見つけることが出来なかった。(23歳, 福祉関係)	2	11%
記録すべき書類の多さ	・学校に通っているうちに書類の多さが嫌になった。(30歳, 福祉関係)	2	11%
自分と職場との適合感	・自分にあった教育理念がなく新しい取り組みが難しいと思い就職をあきらめ新規で設立される老人保健施設へ就職を決める。(32歳, 福祉関係)	1	5%
受け入れ態勢の不十分さ	・実習先で(男性更衣室, トイレ)などの受け入れ体制が整っていなかった。(24歳, 一般職)	1	5%

卒業時に保育職に参入したケースで最も多かったのは、「勉強したからにはなりたいという思い」(8例)であり、次いで「自分を受け入れてくれる園の存在」(6例)という回答であった。保育者になりたいという思いで養成校に入学したのであるから、「ならない」という選択肢はなかったという回答は、ある意味当然と言えば当然かもしれない。しかし、そうは言っても実際に男性を受け入れてくれる園が存在しないことには、その夢も実現しないわけであり、その意味では、男性を採用してくれる園との出会いや採用試験への合格なしには参入はあり得なかったというのも素直な感想であると言えよう。

興味深いのは、参入するという決断をし、その夢の実現に向けての努力を行った結果、見事採用が決まりながらも、いくつかの悩みや葛藤を抱えている点である。もちろん、こうしたことはどの職種においても起こり得ることで、取り立てて「男性保育者だから」と言うべき内容ではないかもしれないが、ここで挙げられた悩みや葛藤は、男性の保育職への参入や継続を妨げる要因として先行研究で繰り返し述べられてきた内容とも一致しており、その意味では「男性保育者ならでは」と言えるのではなかろうか。具体的には、「採用への不安」(4例)、「男性としての立ち位置のあいまいさ」(2例)、「給与面での不安」(1例)、「女性の職場で働くことの難しさ」(1例)、「いつまで続けられるかという不安」(各1例)等が挙げられた。では、そうした不安要因を抱えながらも、保育職に参入した、その理由とはいったい何であろうか。この点に関しては、先に挙げた2つの理由ももちろんであるが、その他に「自分にはこれしかないという思い」(3例)、「一度はやりたいという思い」(2例)、「なりたいたい保育者像

の存在」(1例)等が挙げられた。これらの理由は、先の「きっかけ」において挙げられた「自分流の生き方への憧れ」や「生きがい・働きがいの探求」とも関連して興味深いところである。

他方、卒業時に保育職に参入しなかったケースで最も多かったのは、「新たな可能性との出会い」(11例)であり、次いで「自分を受け入れてくれる園の不在」(7例)という回答であった。先に述べたように、今回調査対象となった養成校2校のうち、1校では専攻科介護福祉専攻が設置されていた。そのため、介護福祉の道に興味を示し、その道を歩んでいくことに決めた者も決して少なくなかった。そうした決断の背景には、自分を受け入れてくれる園の不在という理由も考えられるが、それに限らず、介護福祉の道に新たに楽しさや働きがいを見出し、積極的にその道へと方向転換した者も数多くいたことがうかがえる。その他に、「給与面での不安」(6例)、「保育者になることへの自信のなさ」(6例)、「女性の職場で働くことの難しさ」(3例)、「いつまで続けられるかという不安」(3例)、「男性としての立ち位置のあいまいさ」(2例)、「記録すべき書類の多さ」(2例)、「自分と職場との適合感」(1例)、「受け入れ態勢の不十分さ」(1例)等が挙げられたが、いずれも男性の保育職への参入や継続を妨げる要因として先行研究において挙げられてきた内容と一致するものである。

以上、本研究では、男性保育者を目指して保育者養成校に入学し、保育士資格及び幼稚園教諭一種免許状を取得して卒業した男子学生のその後のキャリア発達上の危機やライフコースについて、質問紙調査を通して検討を

行った。本稿は研究の第一報として、過去から現在までの保育職への参入経験、保育職に興味を持ったきっかけ、及び、保育職参入・非参入の決断時における思いや葛藤に特に焦点を当てて分析を行った。結果は以下の3点にまとめることができる。

第1に、保育者養成校の男子卒業生41名による回答の結果、現在保育職に参入している者は9名（20%）であり、過去に一度は保育職に参入した経験がある者は15名（39%）、過去から現在まで一度も保育職の参入経験がない者は17名（41%）であることが示された。また、短期大学または専攻科の卒業直後に保育職に参入した者に関して言えば、その人数は41名中22名（54%）であり、女子卒業生も含めた全体の卒業生における卒業直後の保育職参入率が例年75%から85%の範囲であることを考えると、比較的低い数値であると言えよう。さらに、この22名のうち現在も保育職に参入し続けている者がどの程度いるかを集計してみると、その人数は7名（17%）となり、さらに低い数値となる。残り15名は、現在は保育職を辞め、別の職場で働いているわけであるが、このうち5年以上にわたって保育職に参入し続けた者はわずか2名に過ぎなかった。1名は27歳のときに3度目の職場から契約を切れ、その時点で家族がいたために保育職に参入し続けることを辞め、別の職場に移ることを決断した者であり、もう1名は公立保育所採用の公務員であったため、現在は異動で市役所勤務であるという者であった。残りの13名は、卒業後すぐに保育職に従事した後、3年以内に退職していた。以上から、男性による保育職の参入は、やはり狭く厳しい道のりであることがうかがえた。

第2に、保育職に興味を持ったきっかけに関しては、「出来事」と「思い」の2つに大きく分けられた。「出来事」としては、「親・親戚等の影響」、「テレビ・新聞・マンガ等の影響」、「職場体験・ボランティア等での子どもとの出会い」、「身近な年下の子どもとの遊びや世話」等が挙げられた。こうしたきっかけは先行研究（中田、2000, 2001）においても指摘されているところであるが、本研究では特に「職場体験・ボランティア等での子どもとの出会い」に関して、世代差が示され、若年層ほどこうした出来事がきっかけとなり保育職への参入を考えるようになったことが示唆された。「思い」としては、「子どもに対する好意的感情」、「人と関わる仕事への興味」、

「自分流の生き方への憧れ」、「生きがい・働きがいの探求」等が挙げられた。ここでは特に「自分流の生き方への憧れ」や「生きがい・働きがいの探求」に関して、男性に特徴的な思いであることがうかがえた。

第3に、保育職参入・非参入の決断時における思いや葛藤に関しては、卒業時に保育職に参入の決断をした者と参入の決断をしなかった者とに分けて分析を行った。その結果、卒業時に保育職への参入を決めた理由としては、「勉強したからにはなりたいという思い」、「自分を受け入れてくれる園の存在」、「自分にはこれしかないという思い」、「一度はやりたいという思い」等の思いが挙げられる一方で、「採用への不安」や「男性としての立ち位置のあいまいさ」、「給与面での不安」、「女性の職場で働くことの難しさ」等、悩みや葛藤が挙げられた。他方、非参入を決めた理由としては、「新たな可能性との出会い」等の思いが挙げられる一方で、やはり同様に「自分を受け入れてくれる園の不在」や「給与面での不安」、「保育者になることへの自信のなさ」、「女性の職場で働くことの難しさ」等の悩みや葛藤が挙げられた。特に、悩みや葛藤に関しては、先行研究においても男性の保育職参入を妨げる要因として指摘されてきたところであり（西野、1997など）、男性ならではのキャリア発達上の危機がうかがえた。しかし、こうした危機に直面してもなお、強く熱い思いを胸に前へ前へと突き進もうとする男子卒業生の姿もうかがい知ることができた。

今後は第二報として、さらに保育職参入後の継続・中途退職という決断時における思いや葛藤、保育職再参入・非再参入という決断時における思いや葛藤、そして、きっかけから現在に至るまでのライフコース等の調査結果について報告する予定である。

引用文献

- 赤澤淳子（2004）男性保育者が直面するダブル・スタンダード．家庭科教育，78（8），25-29.
- 本多潤子・小林育子・櫻井登世子・安村清美・鈴木力・成田眞・高嶋景子・中原篤徳（2007）保育現場において認識されている男性保育者の特徴．田園調布学園大学紀要，1，153-176.
- 井村圭壮（1982）男性保育者に関する保母の意識調査

- 福祉の広場第10号 社会福祉研究センター, 10, 1-20
- 菊池恵子・菊池政隆 (2001) 男性保育者に対する意識：女性保育者・保護者の意識から. 日本保育学会第54回大会, 814-815.
- 西野美佐子 (1997) 男性保育者のキャリア発達：その危機と克服. 社会福祉研究室報, 7, 81-92.
- 長田洋子・高橋美恵子・諏訪きぬ (1996) 男性保育者に求められるもの：保育園長へのアンケートを通して. 日本保育学会第49回大会研究論文集, 480-481.
- 中田奈月 (1999) 性別職域分離とその統合：男性保育従事者の事例から. 奈良女子大学社会学論集, 6, 285-296.
- 中田奈月 (2000) 男性保育者のライフコース：キャリアの実態を通して. 奈良女子大学社会学論集, 7, 67-78.
- 中田奈月 (2001) 男性保育者のライフコース：コーホート分析. 奈良女子大学社会学論集, 8, 51-68.
- 中田奈月 (2002) 「男性保育者」の創出：男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響. 保育学研究, 40, 196-204.
- 中田奈月 (2003a) 女性保育者のライフコース. 奈良女子大学社会学論集, 10, 103-125.
- 中田奈月 (2003b) 「男性保育者」言説の変遷：全国紙を事例として. 家族関係学, 22, 85-94.
- 中田奈月 (2003c) 男性保育者による低年齢児保育の困難. 保育士養成研究, 21, 19-27.
- 中田奈月 (2004) 男性保育者による「保育者」定義のシーケンズ. 家族社会学研究, 16 (1), 41-51.
- 小田ひとみ・林純一・木下比呂美・仲山佳秀・吉田祐子・齋藤政子 (1996) 男性保育者に関する調査研究 (1)：男性保育者養成の現状. 湘北紀要, 17, 93-98.
- 小崎恭弘 (2000) 男性保育者の現状とネットワーク. 日本保育学会第53回大会研究論文集, 632-633.
- 佐々木保行・中村悦子・佐々木宏子・佐藤カツコ (1976) 男性保育者の要求についての実態調査 (第一報)：その1. 日本保育学会第29回大会研究論文集, 29, 95.
- 齋藤政子 (2001) 保育者は男性保育者の存在意義をどのように捉えているか：女性保育者・男性保育者に対する男性保育者に関する意識調査の検討. 日本保育学会第54回大会研究論文集, 66-67.
- 齋藤政子 (2002) 保育園に子どもを預ける親への男性保育者に関する意識調査の検討. 日本保育学会第55回大会研究論文集, 370-371.
- 齋藤政子 (2003) 保育園保護者は男性保育者についてどう捉えているか. 日本保育学会第56回大会, 858-859.
- 齋藤政子・木下比呂美・仲山佳秀・林純一・吉田祐子・小田ひとみ・鈴木弘充 (1998) 男性保育者に関する調査研究 (2)：女性保育者を対象とした男性保育者に関する意識調査から. 湘北紀要, 19, 47-68.
- 鈴木弘充・齋藤政子・木下比呂美・山岸道子・林純一・小田ひとみ (2000) 男性保育者に関する調査研究 (3)：保護者を対象とした意識調査から. 湘北紀要, 21, 35-45.
- 竹沢昌子 (1999) 男性保育者へのまなざし：保育現場における男性保育者に関する意識調査より. 沖縄キリスト教短期大学紀要, 28, 299-310.
- 米谷光弘・角野雅彦 (2000) 保育者養成における男性保育士の位置づけ. 西南学院大学児童教育学論集, 26, 21-71.
- 米谷光弘・宮本博伊 (1986) 男性保育者の現状と今後の展望. 西南学院大学児童教育学論集, 12, 1-41.
- 米谷光弘・宮本博伊 (1988) 男性保育者の養成と今後の課題. 西南学院大学児童教育学論集, 15, 43-64.

付 記

調査にご協力いただきました男子卒業生の皆様に、深く感謝いたします。それぞれの現場におけるますますのご活躍を祈念いたします。